

本願寺「自死問題実態調査」の 分析結果 (8)

教学伝道研究センター
現代宗教課題研究部会

■はじめに

いよいよ、今回でアンケート調査の報告が最終回となります。今回のテーマは、「宗門への要請」です。設問は、次のようなものでした。

自死予防・防止対策、自死遺族ケアに関して、宗門に期待することはありますか。具体的にお書きください。

この質問は、言うまでもありませんが、僧侶の方々、お寺で活動されている方々の現場の声を聞いて、現場で何が要請されているかを確認し、宗門の活動をチェックすること、また頂戴したご意見の中から、アイデアやヒントを得て、今後の活動に活かしていくことを目的として設けられたものです。この質問に対して、九六二件の記述がありました。

その自由記述の内容について、前回同様、東京支所の雲居玄道氏の協力により、K-means 法というクラスタリング解析を

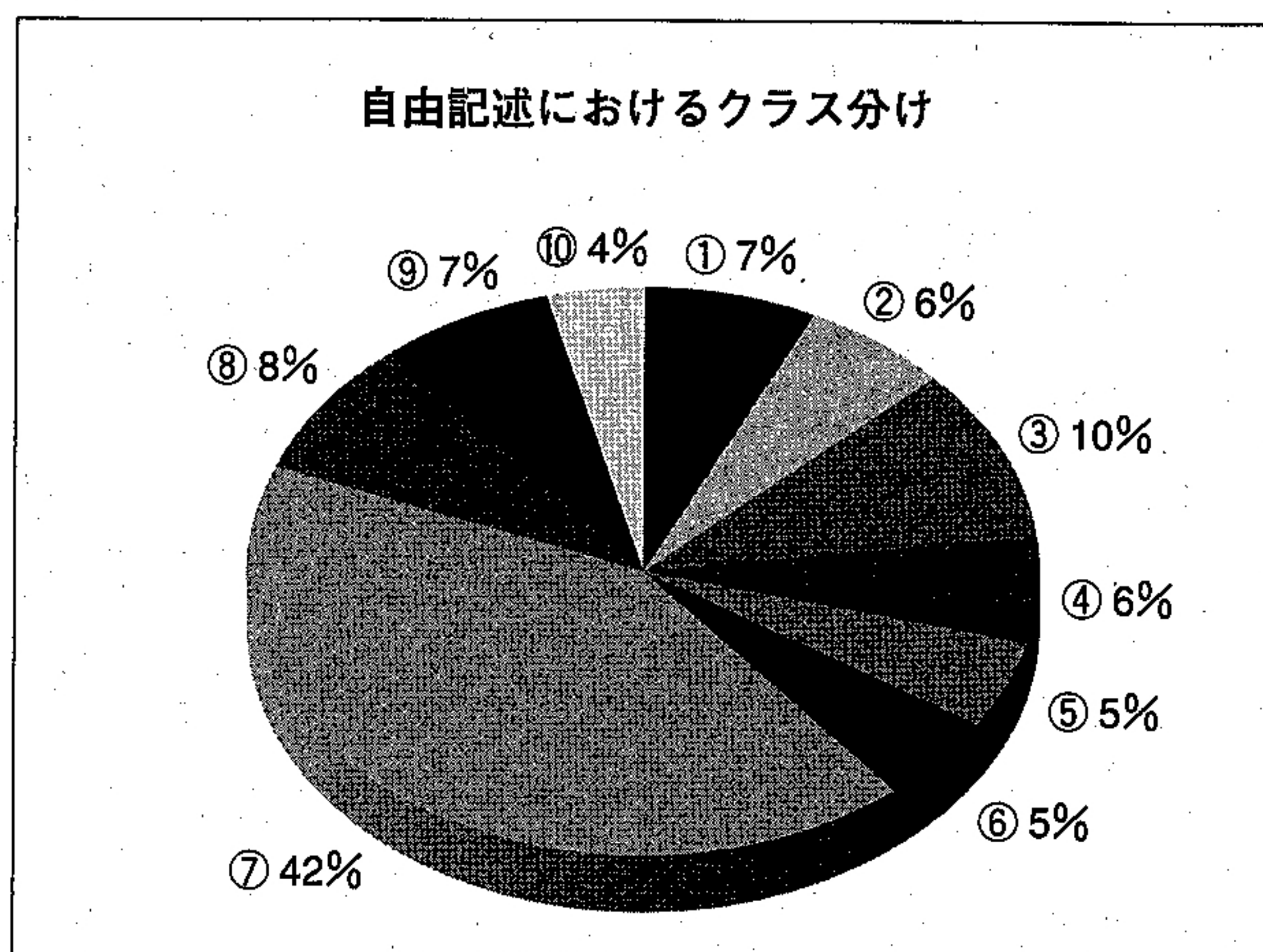
実施しました。その結果が、図1です。

■分類の結果について

前回同様、十種に分類を行っています。それぞれのクラスのキーワードは以下の通りです。

- ① 要請
- ② 遺族支援（ケア）
- ③ 僧侶
- ④ 期待できる／期待できない
- ⑤ 研修会
- ⑥ 社会
- ⑦ 啓発資料、生と死
- ⑧ 相談窓口
- ⑨ 人と場
- ⑩ 命の尊さ^{とうと}

これらの十種の値を見ると、⑦が全体の四二%を占めているに対し、その他のクラスは、四一～一〇%の間の数値となっています。後で分析しますが、⑦は自由記述の内容に他のグループほどの均一性



〈図1〉

が見られません。それに比べて他のクラスは、それぞれ記述内容が明確であり、⑦はそれらの明確な記述から漏れた記述が含まれていると推定されます。そのため、やや突出した数値を示していると考えられます。

■それぞれのクラスの分析

以下では、十種の分類について、一つ

ひとつ検証していききたいと思います。

〈クラス①〉

このクラスの特徴は、「〜してほしい」というように、宗門に対して具体的な要請を行っている点に特徴があります。その内容は多岐にわたりますが、記述内容の項目を列挙すると、以下の七項目に分類することができます。

- a マニュアル、参考書、指導書の作成(↓⑦)
- b 法話の例話集(↓⑦)
- c 研修会(↓⑤)
- d 相談窓口の設置(↓⑧)
- e ネットワークづくり
- f 自死に関する教義上の理解の明確化
- g 社会へのアピール(↓⑥)

これらは、いずれもヘクラス①以外にも見られる記述内容ですが、とくに他のクラスに集中して見られる項目については、括弧内にそのクラスを示しておきました。

これらの項目の中で、記述数が最も多かったのは、最初の「マニュアル、参考書、指導書の作成」です。この要望は具体的な対処方法を知りたいという思いを反映していると考えられます。この記述が多く見られることから、現場の僧侶が、自死問題への対処に困難を感じていることが推察されます。マニュアル等を作成してほしいという要望はヘクラス⑦にも多く含まれているので、ヘクラス⑦の分析の中で、具体的な検証を行うこととします。

また、右に挙げた中で、設問を設けた際に予想していなかったのは、最後の「社会へのアピール」という記述です。しかし、教学伝道研究センターが実際に自死問題に関与していく中で、非常に大きな壁として立ち上がったのは、この「社会へのアピール」ということがらでもありました。この自由記述は、ヘクラス⑥に多く含まれていますので、そこで検討することとします。

ヘクラス②

このクラスのキーワードは、「遺族支援（ケア）」です。要望の内容をさらに具体的にみていくと、「手引き書を作成してほしい」「遺族の集い（つどい）を開催してほしい」と記述されています。

最近、超宗派の僧侶による団体や天台宗など各宗派において、自死遺族の追悼法要が開催されています。いずれの法要にも、多くのご遺族が参加されているようであり、新聞記事を見ると遺族の法要への評価は高いようです。本願寺派の寺院においても、自死遺族を対象とした法要が各地で営まれていけば、遺族支援の大切な場になっていく可能性が大にあるでしょう。

追悼法要は、大きな規模で開催される必要はありませんので、こうした活動は、教区や組単位でも十分に行っていけるものです。もちろん、開催に当たっては細やかな配慮も必要ですので、「自殺対策に取り組む僧侶の会」（代表＝藤澤克己氏）など、すでに実施されている団体の知恵

をいただきながら開催していくことが、一つの方策であろうと考えられます。

もう一点、このクラスについて指摘しておきたいのは、自殺対策の三段階についてです。近年、遺族支援の重要性が認識されるようになり、自殺対策は、プリベンション（事前対応）、インターベンション（危機介入）、ポストベンション（事後対応）の三段階で対応すべきであることが明らかになってきました。

設問には、「自死予防・防止対策、自死遺族ケア」と表現されていて、三段階について明記されていたわけではありませんでしたが、遺族支援について言及しているヘクラス②の自由記述のうち、六〇%の方が、自殺対策を二つないしは三つの局面に分けて記述しています。もちろん、設問の内容からこうした意識が喚起されたのでしょうが、自死問題についての報道や、僧侶としての経験から、自死問題への理解が一定程度深まりつつあると理解できると思います。この三段階について記述された内容を見ても

いくと、予防の困難さと遺族ケアの必要性が指摘されています。この結果から、現場の感覚としても、僧侶の役割が「遺族支援」において大きいと認識されているとわかります。

ヘクラス③

このクラスのキーワードは、「僧侶」です。直前の自由記述のクラスタリングにおいても、一二%が僧侶の資質について記述していました。この設問においても、一〇%の記述が僧侶の資質低下、僧侶の育成の必要性を記述しています。

「僧侶の資質」という点について、自死問題は重要な課題を与えてくれているのではないのでしょうか。僧侶の資質向上は、何より資質を向上させる必要性の中で図られていくものです。本当に必要であるからこそ、そこに学びが生まれてきます。お経を読むためにはお経の内容と読み方を学ばなければなりませんし、法事を行うためには袈裟（けさ）の付け方も学ばなければなりません。「自死」に関与して

いくと、そこに踏み込んだ瞬間に、生死しやうじの問題が突きつけられます。そのため、生死の根本的な問題について学ぶ必要があります。しかも、僧侶は葬儀や法事を行う中で、自覚の有無にかかわらず、すでに「自死」の現場の中に入っているのです。すでに自死への学びの必要性が生じているわけです。しかし、実際には、この個所でも、あるいは他の個所においても、繰り返し自死問題に対応するための資質がないと記述されるのです。

一方で、やむを得ない面があります。自死問題は、やはり困難で複雑なことからであることも確かですし、自死問題において必要とされる、生死に関する根本的な理解や、傾聴といった力、誠実さや謙虚さ、他人を思いやる力というのは、一朝一夕いちぢういつせきに身に付くものではありません。ただ、先ほども述べたように、必要性の中には、真摯しんしな学びが生まれる可能性があります。この点からも、自死問題をきちんと課題としていくことの必要性が再認識できることでしょう。

〈クラス④〉

このクラスのキーワードは、「期待できる／期待できない」です。すなわち、自死問題について宗門へ期待できるかどうかについて記述されているのが、このクラスの特徴となっています。数値としては、「期待できない」がおよそ八五％を占めています。その根拠としては、以下の項目が挙げられています。

- a 予算がない
- b 教学や宗教学ではだめ
- c 個人で関わるべきもの
- d 教区など地域で取り組むべきもの
- e 一人ひとりでやるべきもの
- f 多くのことをやり過ぎているから
- g 研究員の力がない
- h 宗門の体制からは困難

これらの指摘は、いずれも十分に考慮すべきものと思われます。項目の中で最も多かった指摘は、dの「教区など地域で取り組むべきもの」という記述でした。cやeについても、同様の記述と見ることでできるでしょう。自死問題は個別に、

一人ひとりの状況に合わせて継続的に取り組むべきものです。現象全体に一度に大きく網あみをかけるように活動すべきものではないという指摘は、大変に重要なものとして受けとめています。

宗門がこの問題に取り組む場合には、やはり「心」の側面に焦点をあてたものが中心となります。その場合には、やはり一人ひとりの僧侶、一つひとつのお寺が、それぞれの地域の中で、直接人々と接する中で、温もりを感じる関係の中で、取り組まれていくべきものでしょう。それでこそ、日本全国に広がる本願寺派の特性を活かした活動となりえますし、また、細部にまで血の通った活動になると思われます。

また、本願寺でさまざまな自死問題に関連する企画を開催するたびに、「遠いので行けない」という声が聞かれますので、教区や組単位でのさまざまな活動を期待したいと思います。それでは、教区や組の単位で、いかなる実際の活動が可能ででしょうか。

「追悼法要」Ⅱ先にも言及した追悼法要は、地域での開催が可能なものです。自死遺族にとって地域性は大きな問題です。遺族はいまだ偏見の中にあり、自死遺族であることを隠している場合も少なくありません。小規模であってもいろいろな地域で開催されることによって、遺族が安心して集える環境が生まれることになるでしょう。

「啓発資料」「掲示伝道」Ⅱ啓発資料の配付や掲示伝道といった活動も、地域単位で行えます。掲示伝道については、たとえば九月の「自殺予防週間」の間は、地域の全寺院で自死についての掲示を行うといった取り組みを考えているところもあるようです。

ただ、こうした活動も、地域ごとにバラバラに行うよりも、連携しながら活動することによって、より効率的な活動が可能となるでしょう。このクラスでの記述を重要な示唆とし、センターの活動も、諸地域の活動といかに連携しながら進めていくかという点を課題にしていきたい

と思っています。

次に経済的な問題についても触れておきましょう。自死問題の取り組みはさまざまな形がありますが、たとえば二十四時間の電話対応や、大きな規模の研修会の開催を継続的に実施するとなると、大きな予算と労力が必要となります。そのため、経済的な問題と人材面での問題は、自死対策の活動において大きな課題となつてきます。教区や組単位で、これらの活動を維持していくことは容易なことではありません。

ただ、逆転の発想をすれば、経済的な支援や人的な課題を、地域の他の組織や団体、企業との連携の中で解消していくという方法があります。単独では実施できないことも、多くの人々、多くの団体と協力する中で、可能となっていくものもあります。そのことによって、地域全体の活動としていくことができますし、ひいては多くの人々に対する啓発にもつながっていくことでしょう。実際に、自死問題に取り組むNPO団体などは、団

体そのものが独自に潤沢な資金を持っているわけではありませんから、通常、外部の団体・組織から活動資金を調達しています。しかし、このことが必然的に自死問題への多くの理解者を生むことにつながり、問題の共有が実現しているのです。

最後に「期待できる」という記述も、簡単に見ておきましょう。「期待できる」と記述された方は、具体的に、「本願寺での相談者への対応」「相談窓口の設置」「相談できる人材の育成」については「期待できる」と記述しています。この点については、センターの活動について紹介する中で、再度触れたいと思います。

〈クラス⑤〉

このクラスのキーワードは「研修会」です。「研修会」を開催してほしいという要望も強いものがあります。

その記述を更に詳しく見ていくと、
a 教区・組・ブロックでの研修会の

開催

b 本山におけるさまざまな場での自

死問題の学び

の二つの意見に分類することができま
す。

このうち、aについては、ヘクラス④
でも指摘されていた問題でした。地域の
多くの方々が参加していくためには、や
はり教区や組単位での研修会の開催が望
まれます。

次に、bについてですが、本山ではさ
まざまな場で自死問題が取り上げられて
います。センターでは「別離の悲しみを
考える会」や「フォーラム」を継続的に
開催していますし、^{あんじ} 昨年の安居（勸学寮
主催）では、センターの武田慶之研究員
が特別講師となり、自死遺族へのサポー
トをテーマに講義を行いました。また昨
年の布教講会においても、自死念慮者や
遺族への対応方法について、具体的なロ
ールプレイを通して学びを深めました。
このように、宗門のさまざまな研修の
場において、自死問題が取り上げられて

います。

ヘクラス⑥

このクラスのキーワードは「社会」で
す。まず、自死問題という社会問題へ僧
侶が関与することに対する賛否の記述が
見られました。関与に対する積極論が、
慎重論に対して多数を占めており、およ
そ八〇％が積極論の立場でした。そうし
た中、慎重論の根拠となっているのは、
「僧侶の本分を忘れている」「本来の活動
をすべき」という点でした。自死対策の
活動において、僧侶が活動に関与する意
味が、十分に自覚されていくべきでしょ
う。

また、こうした社会問題への関与とい
う点以上に、多くの方が言及していたの
が、「社会へのアピール」という点です。
「宗派は、社会活動についてのアピール
が不足しており、そのことが宗門への低
い評価をもたらしている」、また「アピ
ールができていなければ、認知されてい
ないことになり、取り組みを進めても効

果が期待できない」という記述です。

このアンケートは、センターが自死問
題への取り組みを始めてから、一年ほど
の時期に実施したものです。その時期に
おいては、活動を進めていく上で、「社
会へのアピール」ということは、センタ
ーとしてさほど問題視していませんでし
た。

しかし、具体的な活動を進めれば進め
るほど、この問題は大きな課題となりま
した。結果から言えば、「教団」として行
う活動は、社会へのアピールが大変に困
難です。社会に認知されないことは、す
ぐさま活動の障害となります。知られな
ければ、利用されることがないからです。

社会へアピールしていくためには、何
と言ってもメディアに取り上げられるこ
とが重要です。現代日本社会において、
人々が得る情報のほとんどは、マスメデ
ィアによってもたらされます。そうした
メディアに登場しなければ、日本全体に
認知されることは、期待できません。し
かし、不偏不党^{ふへんふとう}という点において厳格で

あるマスメディアは、特定の教団について特筆する記事を書くことはあまりありません。ただ、宗教団体の社会貢献、特に社会へと開かれた活動はメディアでも取り上げられます。自死問題も、その一つと言えます。

しかし、どのような活動であっても、必要となるのは、外部団体との連携であり、寺院の外に出ていくことであります。現在では、こうした視点も取り入れながら、活動を進めています。

〈クラス⑦〉

このクラスのキーワードは「啓発資料」と「生と死」です。記述数が多く、他にも多くの要素が出ていますが、特に顕著だった二つのキーワードについて取り上げることにしましょう。

「啓発資料」については、すぐに葬儀や法事、その他の場面での対応の仕方について具体的な情報の記載された資料がほしいという声が非常に多くありました。先にも述べたように、現場での困難

が推察される結果と言えるでしょう。

ただ、一つ指摘しなくてはならないのは、これまでも「自死」と一括^{ひとくく}りで論じてきましたが、すべての「死」が一人ひとりの存在に固有なものであるのと同様に、「自死」という「死」も一人ひとりに固有のもので。もし、この固有であるということ——尊厳——が侵害され踏みにじられたならば、それはまさしく自死への偏見を醸^{じょうせい}成させる温床となります。この点については、死の場面に立ち会う僧侶としてしっかりと心に銘記すべき点であると考えます。

基本的な姿勢、考え方は、重要です。遺族ケア、遺族サポートについては、「別離の悲しみを考える会」において、多くの専門的な知見を頂戴してきました。詳細は、『自死、遺された人たち——死別の悲嘆によりそって』（本願寺出版社）をご活用ください。

また、昨年十一月に開催された「第四回 別離の悲しみを考える会」では、自死遺族ケアに先駆的にかかわってこ

れた平山正実氏（聖学院大学大学院教授）にご講演いただきました。先生は、「二次被害を阻止するための遺族支援者の資質」として、以下の八つの点を挙げられています。

- 1 謙虚であること
- 2 チームワークの中で仕事ができること
- 3 バランス感覚の大切さ
- 4 責任感をもつこと
- 5 肯定的思考の大切さ
- 6 忍耐することができること
- 7 心が開かれていること
- 8 会を運営する管理能力

これらの点は、平山氏が活動を実際に進める中で、まさしく具体的に実感されていったことです。とくに、「謙虚であること」についてのお話の中で宗教家を例示しつつ、「遺族の気持ちを理解しようとする誠実さと謙虚さを身に付けるべきであろう」と指摘されています。

こうした基本的な姿勢については、遺族に接する僧侶にとって、重要な指摘と

言えるでしょう。

もう一点、このクラスには重要かつ特徴的な点を見ることが出来ます。それは「生と死」という点です。後で詳しく見るように、ヘクラス⑩は命の大切さについて記述しています。そこでは「生」という点に焦点が当てられています。しかし、このヘクラス⑦では、生について学ぶということがらが、死を学ぶということがらとともに記述されています。これは、宗教者、僧侶ならではの視点と言えるでしょう。前回の分析でも指摘しましたが、「死」を見つめるというのは、仏教という宗教の特徴です。釈尊しやくそんの時代から、たとえば墓地で無常むじやうを観じる行ぎやうがなされたように、「死」「無常」に真正面から向かい合ってきました。その智慧、姿勢を活かすべき、というのは正せい鵠こくを得た指摘であると感じられます。

自死は「封印」されることによって、より複雑な問題となり、また孤立する悲しみを生んできました。ところが、現代社会は、自死だけでなく、「死」そのもの

のを遠ざけ、隔離する社会となってしまいました。

今、「自死」も含め、「死」を問い直す、「死」をきちんと見つめる中で、生の問題を考え、語っていくことが、わたしたち僧侶には課せられているのではないでしょう。

ヘクラス⑧

このクラスのキーワードは「相談窓口」です。このクラスは、相談窓口の設置の必要性を強く訴えています。

現在、センターは自死対策を中心とする相談窓口の開設に向けて、準備を進めています。この点については後に別途、項を設けて説明します。

ヘクラス⑨

このクラスのキーワードは「人」「場」です。それぞれについての記述を挙げてみましょう。

○「人」

「人と人との関係づくり」

「一人と一人との関係性」

「話を聞いてあげられる人となる」

「人と人が談話する」

○「場」

「子どもたちが集える場所」

「何でも語り合える場」

「自死された人の遺族が集える場所」

「最後のよりどころとなれるような場所」

「気軽に花茶が飲めるような場所」

「かけ込み寺のような場所」

「ケア活動ができる場所」

ここでいう「場」「場所」は、単なる空間ではありません。「人」がいることによって、生まれる「場」です。そこでは、人と人がきちんと関係し合い、落ち着いて話を聞いてあげられる人がいて、安心して悩みを語ることができる、そういう場所です。こうした「場」の提供、創出が宗門に必要であると、このクラスでは記述されています。

たとえば「東京自殺防止センター」には、「コーヒーハウス」という名称で、

「人間関係につまずいたり、疲れた人達が集まって互いに語りあう場」が設けられています。「こころのカフェきょうと」では、死別体験の「分かち合い」だけでなく、「フリースペース」という名の「くつろいだ雰囲気ふんいきでお茶を飲んだりお菓子を食べたりしながら自死遺族の方が、気持ちを語り合える自由な場所」が設けられています。

このように、安心して集まり語り合うことのできる場があることは、とても重要です。今後、どのような場をつくることができるかは、京都の本願寺という場所だけでなく、わたしたち一人ひとりの僧侶や、一つひとつの寺院に課せられた課題と言えるでしょう。

へクラス⑩

このクラスのキーワードは「命の尊さ」です。「命の尊さ」は、最初の意識調査等においても数多く言及され、このアンケート全体において、繰り返し記述されてきたことがらです。「命の尊さ」の重

要性は、言うまでもありません。命の軽視は、決して等閑視とうかんしできない問題です。

ただ、仏教の基本に「対機説法たいきせっぽう」という考え方がるように、いつ、どのような状況の中で語られていくべきかは、とても重要なことがらです。平山正実氏を中心として作成された「自死者の名誉回復文」の一部を紹介します。

「わたくしたちは、自死者はいのちを大切にしなかったわけではなく、それぞれのかかえる問題でやむにやまれず、みずからの命を絶たざるをえない状況に追い込まれたのだと考えます」「わたくしたちは、自死者は繊細せんさい、純粹、心やさしく、死ぬまで精一杯努力し、まじめに生きてきた人たちであると考えます」

この宣言中の「いのちを大切にできなかった」という言葉は、「死ぬまで精一杯努力し、まじめに生きてきた人たち」とその遺族に対して「命の大切さ」が説かれることで罪責感を深めてしまう問題点を鋭く突いています。自死は、生死の問

題であり、そこに一般的な価値観を安易に持ち込むことの問題点について、私たちは自覚的でなければなりません。

■活動の展望

現在、センターも含め、本願寺派全体で自死問題に取り組んでいます。これまでに、ブックレットの作成、ワークショップの開催、アンケート調査の実施など、さまざまな活動を行ってきましたが、来年度からは、自死予防の活動を積極的に進めていくこととなりました。

具体的には、今年四月から、電話相談窓口開設に向けて、準備していくこととなりました。これは、東京自殺防止センターや大阪自殺防止センターと同様に、「ビフレンディング」(相談者のつらい気持ちをもそのまま受け止め、味方になる)を行うボランティア活動から学ばせていただき、開設する電話相談機関です。

本願寺派における自死問題への取り組みは、およそ三年前に開始されました。

この三年間という時間の中で、徐々に活動を進め、拡大してきました。

電話相談という活動は、自死念慮者に直接関与していくことであり、早い段階からとても有効であり重要であるとの認識がありました。ただ、本アンケートでも多く指摘があったように、経済的な問題や人材（スキル）の問題がありました。

しかし、今回、宗会でも取り上げられたことなどによって、宗門からも大きな経済的な支援を得ることができることとなり、一気に相談窓口開設へと進んでいくことが可能となりました。

○人材育成

電話相談は、すぐに誰にでもできるものではありません。しかし、カウンセラーとも性格が異なります。カウンセラーには「治療」という性格がありますが、電話相談においては、苦悩を「聴く」ということが中心となります。

自死念慮者は、身近な人には悩みを語れない方がいます。社会的な圧力のために弱音をはけない状況にある人がい

ます。そうした人は語ることによって心が整理されたり、また聞いてもらえること自体が心の支えとなっていくことがあります。そうした活動が、今回の電話相談の中身です。

ボランティアがいなければ、この活動を行っていくことはできません。一定の研修期間を経て、電話相談を担当することとなりますが、来年度からその研修を京都にて開始する予定です。僧侶だけを対象としたものではありませんが、ぜひとも多くの僧侶の方々にも参加していただきたいと考えています。

○募 金

このたびの活動は、電話相談を中心としますが、その他にも研修会・講演会の開催、啓発資料の作成など、多くの活動を予定しています。これらの活動のためには、多くの資金が必要です。宗門からも支援をいただく予定です。が、その他にも募金によって、活動資金を確保していきます。すでに、昨年

の十二月末から募金活動を開始しました。年度末までに、定期的に京都市街において、活動を認知していただくためのチラシを配布するとともに、街頭募金を行う予定としております。

募金は、口座振込という形でもお願いしております。多くの方のご協力をいただければ幸甚です。

○体 制

電話相談窓口業務は、本願寺の人的、経済的な支援の中で活動していくものです。活動内容は、前述のように自死念慮者の声を聞いていく活動であり、早い段階でNPO団体となり、広く京都や近隣の方々にご参加いただけるような「開かれた」団体となることを目指しています。活動にあたっては、特定の教義に基づき活動を行うことや布教などの宗教的行為は一切行いません。

現在も、他宗派や他宗教からの協力もいただいております。また、行政や、関係するNPO団体からもご支援いた

だいています。このように、多くの
人々、多くの組織、団体とのネットワ
ークの中で、運営されていく相談機関
であります。

○フォーラム・ワークショップの開催

この記事が掲載される時点では、す
でに会が終わっていますが、電話相談
窓口の開設に向けての、フォーラム
(二月五日)も開催します。フォーラ
ムでは、大阪大学総長である鷲田清一
氏から「生きることの支援」という点
について講演いただきます。また、フ
ォーラムに引き続いて、ワークショッ
プを開催します。このワークショップ
では、電話相談のロールプレイによる
研修を行います。このワークショップ
において関心を深めていただき、その
中から、ボランティアとして活動して
いただける人が一人でも多く出ていた
だけばと考えています。

以上、二〇一〇年度から本格的に準備
を開始する電話相談窓口について、紹介

しました。この活動がきっかけとなり、
自死問題についての理解がより一層深ま
り、本願寺派の活動が一つの中心となっ
て、より良い社会、住みやすい社会、生
きやすい社会、悩みを打ち明けやすい社
会をつくっていくことに寄与できればと
考えています。

無関心であることは、大きな罪である
ということ、この問題に関係していく
中で強く感じるようになりました。そば
にいる人の思いを感じられる社会が、今、
この瞬間から始まっていくこと、京都と
いう場所から始まっていくこと、そんな
願いを持ちながら、活動を進めています。
最後になりましたが、本アンケートに
協力いただき、多くの重要な示唆を与え
てくださった皆さまに、心より感謝申し
上げます。

悲しみは悲しみを知る悲しみに救わ
れ、涙は涙にそそがれる涙にたすけら
る。

(金子大榮『歎異抄領解』)

(常任研究員 藤丸智雄)

i 新聞記事には二〇〇八年十二月に東京
で行われた法要について次のようにあり
ました。「アンケートには『苦しんでい
るのは私だけじゃないと知り、勇気づけ
られた』『あの子は浄土にいるんだと心
から思えた』など感謝の言葉が並んだ。
藤澤代表は『仏教の持つ力への期待を強
く感じた』と話す」(二〇〇九年一月七日
毎日新聞大阪朝刊)。また、「仏教タイム
ス」の二〇一〇年一月一日号には二〇〇
九年末に東京・名古屋・大阪の三都市で
法要が営まれたことが報告されていま
す。また、天台宗の総本山延暦寺で昨年
九月に開催された自死者の追悼法要は、
朝日新聞(二〇〇九年十月十四日付)で紹
介されました。

ii 自死アンケートについては、多くの新
聞の記事となりました。教団レベルでの
活動はあまりメディアにのりませんが、
特徴的な活動であれば可能性があると言
えます。

iii この点については、シンポジウム「宗
教とメディア」(武蔵野大学仏教文化研究
所)において江田昭道研究員によって発
表がなされ、来年度ブックレットとして
発刊される予定です。

iv 『現代のエスプリ 封印された死と自死
遺族の社会的支援』(至文社、七九〇八一頁)